比較文化研究
№114，2014

頻度副詞に関する一考察
――程度副詞との関係を中心に――

江　　雯　薫
（台湾・淡江大学）

A Study on Adverbs of Frequency
――Focusing on the Relationship Between Adverbs of Degree―― and Frequency

Wen-Shun CHIANG
Tamkang University of Taiwan

Abstract

This article aims to examine the restrictions on using frequency adverbs and adverbs of degree, as well as discuss the relationship between the two categories, in the attempt to more clearly define frequency adverbs as a whole. In situations in which they can be used together, we will observe the characteristics of the predicate clause, strength of impact, and whether they depict an "already completed" action. Conclusions drawn include: if the adverb of degree is located after the frequency adverb, the sentence expresses the overall frequency, and the adverb of degree modifies the frequency adverb. If the frequency adverb is located after the adverb of degree, the adverb of degree modifies the phrase directly following it, and the frequency adverb applies to the entire modified phrase and adverb of degree.

1．はじめに

現代日本語において、事態の捉え方から頻度副詞と程度副詞をみると、頻度副詞は事態の外側から事態の実現の仕方を限定するものであるが、程度副詞は事態の内側から事態の実現の仕方を限定するものである。たとえば、「よく」の例をみると、次の（1）は頻度副詞として、（2）は程度副詞として用いられるものである。以下の例では、頻度副詞の下に一重線を、程度副詞の下に二重線を引いて示す。

（1）　ママは<u>よく</u>日本食をつくる。そうして僕は、日本食が好きだ。（日々）

(2)　東京の下町にある遠藤パン店は、おいしいパンを売るのではんじょうしていた。とくに、遠藤パン店のアンパンはよく売れた。(ブン)

(1) の「よく」は「日本食をつくる」という事態の外側にあり、その頻度の高さを表す。それに対して、(2) の「よく」は「アンパンは売れた」という事態の内側にあり、その事態の程度の高さを表す。また、頻度副詞、程度副詞の位置関係をみると、次のようなことが見られる。

(3)　何かをしていただいた御礼をさしあげるとき、何を差し上げたらいいのかいつも非常に悩みます。(http://q.hatena.ne.jp/1207902649)

(4)　大阪人はおにぎりせんべいを非常によく食べる。
(http://chiebukuro.toremaga.com/dir/detail/q1241098252/web)

(3) では、「いつも」は「非常に悩みます」ことを修飾し、(4) では「非常に」は「よく食べる」ことを修飾する。前者は頻度副詞の「いつも」が程度副詞の「非常に」の外側にある例であるが、後者は程度副詞の「非常に」が頻度副詞の「よく」の外側にある例である。このようにそれぞれの文中における位置をみると、頻度副詞が程度副詞の外側にある場合もあれば、逆の場合もあると言える。また、(5) のように程度副詞が頻度副詞を修飾できない場合がある。

(5) ＊彼は非常に {しばしば／たびたび} 一人で映画を見に行く。(作例)

(5) では、「非常に」という程度副詞は「しばしば」「たびたび」のような頻度副詞を修飾すると、非文となる。

(3)～(5) をみると、頻度副詞と程度副詞との修飾関係はどのようなものか、そしてそれぞれにはどのような制限があるのかを考察する必要があると思われる。本稿ではそれについて考察する。

なお、研究対象については、仁田 (2002) に基づき、頻度副詞の場合は、「いつも」「常に」の類に属する「いつも」、高頻度の副詞に属する「ひんぱんに」「よく」、中頻度の副詞に属する「しばしば」「たびたび」「ときどき」、低頻度の副詞に属する「たまに」「まれに」を中心とし、程度副詞の場合は「非常に」「ごく」を中心とする[1]。

2．先行研究

頻度副詞と程度副詞との関係について論じた先行研究には、管見の及ぶ限り仁田 (2002) がある。

仁田 (2002) は「程度の副詞によって修飾を受けうる可能性があるのは、一定期間における事態生起の多寡性や生起間隔の隔たりの短さ・長さを表す、事態生起の間隔の長短に関わる頻度の副詞である。このタイプは、生起の多寡性や隔たりの長さという程度性や度合い性を持つ意味を担っていることによって、程度の副詞の修飾を受けうる (P289)」とし、また「「ヒンパンニ」が高頻度、「マレニ」が低頻度の副詞であった。高頻度も低頻度も、程度の極端なものであった。極端であることにより、程度の副詞によって、その程度性を際立たせることが、自然でありかつ効果を持つことになる。それに対して、「タビタビ」や「時々」「時折」といった中頻度のタイプは、頻度が中程度であることによって、その中という程度性を程度の副詞によって際立たせる必要性や効果が、基本的に生じない (P289)」ということも述べている。

先行研究では、程度副詞と頻度副詞とが共起できる条件が示されているが、互いに共起できる場合には、それぞれにどのような構文的な特徴があるのかはまだ論じられていないと言える。

本稿では、まず程度副詞が頻度副詞の外側にある場合と、頻度副詞が程度副詞の外側にある場合に分ける。次に、頻度副詞と程度副詞が共起できない場合の制約を考察する。そして共起できる場合は、文末の述語の特徴についてや、係り先、実現した事態であるかどうか、といった観点から、頻度副詞と程度副詞との関連性を分析し、頻度副詞の体系を明確にすることを目的とする。

3．程度副詞が頻度副詞の外側にある場合

程度副詞が頻度副詞の外側にあると、以下の（6）～（9）のように共起できない場合がある。

（6）＊彼は非常に｛しばしば／たびたび／ときどき｝一人で映画を見に行く。（作例）

（7）＊彼はごく｛しばしば／たびたび／ときどき｝一人で映画を見に行く。（作例）

（6）（7）では、「しばしば」「たびたび」「ときどき」は中頻度の副詞であるが、「非常に」「ごく」は程度の著しさを表す副詞である。両者は共起すると、非文となる。それは、中頻度であり、極端な度合いを示さない「しばしば」「たびたび」「ときどき」が、程度の著しさを表す「非常に」「ごく」[2]と釣り合わないからである。このことは仁田（2002）でも述べられている[3]。また、

（8）＊彼はごく｛ひんぱんに／よく｝一人で映画を見に行く。（作例）

（9）＊彼は非常に｛たまに／まれに｝一人で映画を見に行く。（作例）

（8）では、「ひんぱんに」「よく」は高頻度の副詞であり、「ごく」と共起すると、非文となる。また、（9）の「たまに」「まれに」は低頻度の副詞であり、「非常に」と共起すると、非文となる。「ひんぱんに」「よく」「たまに」「まれに」のいずれも極端な度合いを表す頻度副詞である。一方、「ごく」は程度が極限近くにあることを、「非常に」は程度の甚だしさを表す程度副詞である。（8）（9）が非文となることから、「ごく」は高頻度の副詞と、「非常に」は低頻度の副詞と相容れないと言える。つまり、両極端を表す頻度副詞と共起できるかどうかは「ごく」「非常に」の表す語彙的な意味と関わっている[4]。このことは、次の例からも説明できる。

（10）　義理の母が非常に頻繁に肺炎になります。
（http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1168249561）

（11）　大阪人はおにぎりせんべいを非常によく食べる。
（http://chiebukuro.toremaga.com/dir/detail/q1241098252/web）

（12）　青雲堂のおじさん小母さんも、もとより桃子を心から歓迎し、それからごくたまに、桃子はここで下田の婆やに会った。（楡家）

（13）　私たちは、そこで酒を飲み、女とつき合い、議論をし、時には稼ぎ、ごくまれに勉強をした。（風に）

（10）（11）（（4）の再掲）のように「非常に」は「頻繁に」「よく」のような高頻度の副詞と共起でき、（12）（13）のように「ごく」は「たまに」「まれに」のような低頻度の副詞と共起できる。つまり、「非常に」は高頻度の副詞と、「ごく」は低頻度の副詞と相容れるのである。

以上から、程度の甚だしさを表す程度副詞は程度の度合いが際立たない中頻度の副詞と共起しないことと、高頻度の副詞と低頻度の副詞が程度の甚だしさを表す程度副詞と共起できるかどうかは程度副詞の表す語彙的意味が関わってくることが明確になった。

ところで、程度副詞が頻度副詞と共起できる場合を見ると、「非常にひんぱんに」「非常によく」「ごくたまに」「ごくまれに」がある。以下では、文末の述語の特徴についてや、係り先、文全体が実現した事態であるかどうか、といった観点から、構文的な特徴を考察する。

３．１　文末の述語からみる場合

「非常にひんぱんに」「非常によく」「ごくたまに」「ごくまれに」の文末にどのような述語がくるかをみると、次のようになる。以下の例では、述語の下に波線を引いて示す。

(14)　この中学校では無断欠席をする子が{＊非常にひんぱんに／○非常によく／○ごくたまに／○ごくまれに}いる。[5]（作例）

(15)　この会社では上司からの嫌がらせは{○非常にひんぱんに／○非常によく／○ごくたまに／○ごくまれに}ある。（作例）

(14) の「いる」は存在を表し、「状態性」を持つものである。これは工藤（1995）で言えば、いわゆる静態動詞である。一方、「ある」は「状態性」を持つ静態動詞であるが、(15) のように「起こる」と解釈でき、「運動性」[6]をもつ場合もある。「状態性」を持つ述語は「非常によく」「ごくたまに」「ごくまれに」の文末にくることはできるが、「非常にひんぱんに」の場合はできない。また、「運動性」を持つ述語が文末にくる場合をみると、

(16)　彼女は{○非常にひんぱんに／○非常によく／○ごくたまに／○ごくまれに}ドラマに出演する。（作例）

(17)　彼女は{○非常にひんぱんに／○非常によく／○ごくたまに／○ごくまれに}意見が変わる。（作例）

(16) の「出演する」は動作を、(17) の「変わる」は変化を表し、いずれも「運動性」を持つ動詞である。このような動詞が文末にくることができる、ということから、「運動性」は「非常にひんぱんに」「非常によく」「ごくたまに」「ごくまれに」の文末の述語にとっては重要な要素の一つであると言える。ただし、次の (18)～(21) のように「運動性」を持っていても非文になる場合がある。

(18) ＊彼は{非常にひんぱんに／非常によく／ごくたまに／ごくまれに}田舎に住む。（作例）

(19) ＊彼は{非常にひんぱんに／非常によく／ごくたまに／ごくまれに}郵便局に勤める。（作例）

(18) の「住む」は「ある家や場所で長期間生活する」ことを、(19) の「勤める」は「長期間会社などに勤務する」ことを表し、いずれも「運動性」が希薄である[7]。また、その長期間居住している状態や勤務している状態には「限界性」がない。(18)(19) が非文となることから、各副詞を用いる文には「運動性」だけでなく、「限界性」も必要であると言える。このことは、次の (20)(21) も説明できる。

(20) ？彼は{非常にひんぱんに／非常によく／ごくたまに／ごくまれに}泳ぐ。（作例）

(21) ？彼は{非常にひんぱんに／非常によく／ごくたまに／ごくまれに}走る。（作例）

(20) の「泳ぐ」と (21) の「走る」は「限界性」を持たない動詞である。各副詞と共起すると、許容度が落ちる[8]が、(20) は「川で」、(21) は「公園を」のような補語を入れると、許容度が高くなる。

(20') 彼は {非常にひんぱんに／非常によく／ごくたまに／ごくまれに} 川で泳ぐ。(作例)

(21') 彼は {非常にひんぱんに／非常によく／ごくたまに／ごくまれに} 公園を走る。(作例)

それは、「川で」「公園を」が「泳ぐ」「走る」といった「限界性」を持たない動作に全体量を限定するからである。このことから、「限界性」も必要であると言える。

以上から「運動性」「限界性」は「非常にひんぱんに」の文末の述語にとっては重要であるが、それに加えて「状態性」を持つ述語も「非常によく」「ごくたまに」「ごくまれに」の文末に来ることができると言える。つまり、「状態性」を持つ述語が「非常にひんぱんに」の文末に来ることができないのは、「非常にひんぱんに」の持っている語彙的な意味と相容れないためである。

3.2 係り先からみる場合

程度副詞が頻度副詞に係るのか、あるいは文末の述語まで係るのかをみると、次のようになる。

(22) 消費税を引き上げるといった動きが非常に頻繁にされています。
(http://sidlauhizoi.net/bit/no_9)

(23) このパタンは非常によくある。(作例)

(24) ごくたまに、なんの脈絡もなく、僕はこのドゥーワップ・グループの名前を思い出す。(ラハイナ)

(25) ごくまれに、隣の祖母が庭の桔梗などを一りん、小さな壺に入れて持って来てくれたりする。(太郎)

(22) では、「頻繁に」は「されています」を修飾し、「非常に」は「頻繁に」の程度性を表す。(23) では、「よく」は「ある」を修飾し、「非常に」は「よく」の程度性を示す。(24) では、「たまに」は「なんの脈絡もなく、僕はこのドゥーワップ・グループの名前を思い出す」ことの全体を修飾し、「ごく」は「たまに」の程度性を限定する。また、(25) では、「まれに」は「隣の祖母が庭の桔梗などを一りん、小さな壺に入れて持って来てくれたりする」ことを修飾し、「ごく」は「まれに」の程度性を強調する。

このようにみると、「非常に」は「ひんぱんに」「よく」に、「ごく」は「たまに」「まれに」に係り、その直後にくる頻度副詞とは切り離せず、それぞれの程度性を限定する。つまり、程度副詞はその直後にくる頻度副詞との緊密度が高く、その程度性を強調すると言える。

3.3 文全体が実現した事態であるかどうかといった観点からみる場合

(26) ＊ {非常にひんぱんに／非常によく／ごくたまに／ごくまれに} 部屋を掃除しよう。(作例)

(27) ＊ {非常にひんぱんに／非常によく／ごくたまに／ごくまれに} 部屋を掃除してください。(作例)

(28) ＊ {非常にひんぱんに／非常によく／ごくたまに／ごくまれに} 部屋を掃除せよ。(作例)

意志、依頼、命令のいずれも未実現の事態を表す。(26)～(28) が非文となることから、「非常にひんぱんに」「非常によく」「ごくたまに」「ごくまれに」を用いる文は実現した事態でなければならないと言える。次の (29) のように未来においても確実に実現する事態なら、「する」形を用いても非文とならない。

(29)　彼女は {○非常にひんぱんに／○非常によく／○ごくたまに／○ごくまれに} 部屋を掃除する。(作例)

以上のことから、程度副詞が頻度副詞の外側にある場合は、実現した事態を表さなければならないと言える。

4．頻度副詞が程度副詞の外側にある場合

頻度副詞が程度副詞の外側にある場合は、一般的には「＊ひんぱんに非常に」「＊よく非常に」「＊たまにごく」「＊まれにごく」のように用いられないが、「いつも相当に」「いつも非常に」「いつも極めて」のように、頻度副詞である「いつも」は程度副詞と共起しやすい。それらを比べてみると、「いつも非常に」はほかのものより使用頻度が高いため、以下ではそれを中心に考察する。

4．1　文末の述語からみる場合

(30)　そういうことは {いつも} 非常に多いです。(語る)

(31)　家族としては {いつも} 非常に迷惑です。(語る)

(32)　この会社の管理はいつも非常に問題がある。(作例)

(30) の「多い」は「物事がたびたび起こる」ことを、(31) の「迷惑です」は「ある行為がもとで、他の人が不利益を受けたり、不快を感じたりする」ことを表す。また、(32) の「問題がある」は「困った事柄や厄介な事件がある」ことを表す。これらのいずれも「状態性」をもつ例である。このようにみると、文末における述語の特徴を見ると、「状態性」「程度性」を持つ形容詞、形容動詞、感情動詞などが文末にくることができ、「状態性」は「いつも非常に」にとっては重要であると言える。但し、次の (33) の「いる」のような動詞を用いると、非文となる。

(33) ＊彼はいつも非常に図書館にいる。(作例)

それは、「いる」が均質的な状態を表し、程度性を持たないからである。(33) が非文になるということから、「いる」は程度の甚だしさを表す「非常に」と相容れないと言える。また、

(34)　米内は、{いつも} 山本を非常に信頼していた。(五十六)

(35)　彼は大学受験に失敗したことをいつも非常に残念がっていた。(作例)

動詞が文末にくることができる場合の多くは、(34) の「信頼する」や (35) の「残念がる」のように感情を表す動詞である。それは、人の感情には「程度性」があるからである。

以上から「状態性」や「程度性」は「いつも非常に」を用いる文には重要であると言える。

４．２　係り先からみる場合

（36）　{いつも} バスは非常にゆれた。（孤高）

（37）　七月と八月は杉村さんがお芝居に出てらしたから、撮影を休んだんですよ。{いつも}　それが非常に心配でね。（阿川１）

（38）　父が死んで以来、信夫は {いつも}　一家三人の心の結びつきを、非常に大事に思って来た。（塩狩峠）

(36)(37) では、「いつも」は、「バスは」「それが」の前と後とのどちらかに置くことができる。(38) では「いつも」は「非常に」の前に置くより、「一家三人の心の結びつきを」の前に置いたほうが自然であると思われる。このようにみると、「いつも」は「非常に」と切り離してもよい、つまり頻度副詞は程度副詞との緊密度が高くないと言える。

４．３　文全体が実現した事態であるかどうかといった観点からみる場合

(39) ＊彼をいつも非常に信頼しよう。（作例）

(40) ＊彼をいつも非常に信頼してください。（作例）

(41) ＊彼をいつも非常に信頼せよ。（作例）

(39)～(41) のように意志、依頼、命令は未実現の事態を表すモダリティ形式である。(39)～(41) が非文であることから、「いつも非常に」を用いる文は実現した事態でなければならないと言える。それは次の（42）も説明できる。

（42）　彼の家に行くと、いつも非常に丁寧にもてなされる。（作例）

(42) の「彼の家に行くと、丁寧にもてなされる」ことは過去の経験から述べる文である。つまり、実現した事態に対して述べる文である。

以上から、「いつも非常に」を用いる文は実現した事態でなければならないと言える。

５．まとめ

以上の考察から、程度副詞が頻度副詞の外側にある場合は、実現した事態を表わさなければならないという点で、頻度副詞が程度副詞の外側にある場合と共通している。だが、次のような違いがある。

文末の述語からみると、程度副詞が頻度副詞の外側にある場合は、「非常にひんぱんに」のように文末に「運動性」「限界性」が必要であるものもあれば、「非常によく」「ごくたまに」「ごくまれに」のようにそれに加えて「状態性」もくることができるものもある。それに対して、頻度副詞が程度副詞の外側にある場合は、「いつも非常に」のように「状態性」「程度性」が必要である。

係り先からみると、程度副詞が頻度副詞の外側にある場合は、程度副詞がその直後に来る頻度副詞とは切り離せないのに対して、頻度副詞が程度副詞の外側にある場合には、頻度副詞を程度副詞とを切り離してもよい。このことから、程度副詞と頻度副詞の緊密度を見ると、程度副詞が頻度副詞の外側にある場合のほうが高いと言える。

このように見ると、程度副詞が頻度副詞の外側にある場合には、頻度副詞は文全体の頻度を示し、程度副詞は頻度副詞を強調するのに対して、頻度副詞が程度副詞の外側にある場合には、程度副詞は直後にくるものの性質などを修飾し、頻度副詞は程度副詞の修飾する事態全体を包み込むのであると言える。

注

[1] 仁田（2002）は、頻度副詞の定義について、「事態生起の回数的なあり方から、事態に対して、事態の成立のありようや成立状況を付加し特徴づけたものである（P261）」とし、またその種類を、「いつも」「常に」の類、「ひんぱんに」「よく」のように高頻度を表すもの、「しばしば」「たびたび」「ときどき」のように中頻度を表すもの、「たまに」「まれに」のように低頻度を表すものに分けている。一方、程度副詞については、「いわゆる程度副詞と、およびそれに隣接する量副詞と呼ばれることのある存在を、副詞的修飾成分という立場から、＜程度量の副詞＞として関連づけて扱い、それらの似かよいと異なりを捉えながら、その下位的タイプ・文法的特性および共起する述語のタイプ・特徴などを見ていくことにする（P145）」としている。また、「＜程度量の副詞＞としてまとめたものを、文法的な働き方や共起する述語のタイプから、＜程度の副詞＞と＜量の副詞＞に分け、程度の副詞を＜純粋程度の副詞＞と＜量程度の副詞＞とに分ける（P162）」ともしている。本稿で取り扱う「非常に」「ごく」は＜純粋程度の副詞＞に属するものである。

[2] 仁田（2002）では、純粋程度の副詞と量程度の副詞との異なりを識別するテストについて、「「オ酒ヲ［X］飲ンダ」／「［X］歩イタ」などの「X」の箇所に挿入できるか否か、というテストである。挿入可能なタイプが、量程度の副詞であり、挿入すると逸脱性を生じてしまうのが、純粋程度の副詞である（P163）」とされている。この基準に従えば、「非常に」「ごく」は純粋程度の副詞に属すると言える。

[3] 仁田（2002）では、「高頻度も低頻度も、程度の極端なものであった。極端であることにより、程度の副詞によって、その程度性を際立たせることが、自然でありかつ効果を持つことになる。それに対して、「タビタビ」や「時々」「時折」といった中頻度のタイプは、頻度が中程度であることによって、その中という程度性を程度の副詞によって際立たせる必要性や効果が、基本的に生じない（P289）」と述べられている。

[4] 飛田・浅田（1994）では、「非常に」について、「話者の主観として程度が通常の状態を超えてはなはだしいことを誇張するニュアンスがある。好ましい程度についても好ましくない程度についても用いられる（P443）」と説明されている。また、「ごく」について、「程度が極限に近い範囲にある様子を強調して表すが、程度がはなはだしいこと自体については、特定の感情は暗示されていない。また、極限が考えられるものの程度について用いられ、極限が存在しないものの程度についてはあまり用いられない（P146）」と説明されている。

[5] 「この中学校では無断欠席をする子が非常にひんぱんにいる」という文は、「この中学校では無断欠席をするケースが非常にひんぱんに起こる」と解釈するなら、非文とならない。

[6] 動詞の分類については工藤（1995）を参照することにする。具体的に言えば、静態動詞や内的情態動詞や外的運動動詞などが、文末にくることができるかどうかによって、「状態性」「運動性」「限界性」が文末にとって必要な要因となりうるかどうか、ということがわかる。なお、本稿では、「運動性」とは出来事や事態が動作や変化をしている様子を表すことをいう。

[7] 「住む」「勤める」のような動詞は動作動詞に属するが、長期間の状態を表すもので、「走る」「読む」のような実際の動作を表す動作動詞よりも「運動性」が希薄である。

[8] （21）の「彼は非常によく泳ぐ」と（22）の「彼は非常によく走る」といった二つの文における「よく」は、程度副詞として用いられる場合は非文とならないが、頻度副詞として用いられる場合は許容度が落ちる。

参考文献

工藤浩（1983）「程度副詞をめぐって」、渡辺実編『副用語の研究』、明治書院。

――（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」、森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法３モダリティ』、岩波書店。
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現』、ひつじ書房。
――（2002）「現象と本質―方言の文法と標準語の文法」、『日本語文法』２巻２号、くろしお出版。
陳連浚（2011）「「非常に」についての一考察」、『日本研究』24、日本研究研究会。
西原鈴子（1991）「副詞の意味機能」、『副詞の意味と用法』、国立国語研究所、大蔵省印刷局。
矢澤真人（2000）「副詞的修飾の諸相」、仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人、『日本語の文法１文の骨格』、岩波書店。
仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』、くろしお出版。
飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』、東京堂出版。
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』、角川書店。

使用テキスト（例文の文末には、実例の場合は出典を記し、作例の場合は「作例」と表記し、インターネットで調べた例の場合はそのホームページアドレスを記す。）

阿川１＝阿川佐和子『阿川佐和子のこの人に会いたい』（文春文庫）文藝春秋（1997）
五十六＝阿川弘之『山本五十六』（CD-ROM版新潮文庫の100冊）新潮社（1995）
孤高＝新田次郎『孤高の人』（CD-ROM版新潮文庫の100冊）新潮社（1995）
風に＝五木寛之『風に吹かれて』（CD-ROM版新潮文庫の100冊）新潮社（1995）
語る＝阿川佐和子『男は語る』（文春文庫）文藝春秋（1992）
塩狩峠＝三浦綾子『塩狩峠』（CD-ROM版新潮文庫の100冊）新潮社（1995）
太郎＝曽野綾子『太郎物語』（CD-ROM版新潮文庫の100冊）新潮社（1995）
楡家＝北杜夫『楡家の人々』（CD-ROM版新潮文庫の100冊）新潮社（1995）
日々＝江國香織『こうばしい日々』新潮文庫（1995）
ブン＝井上ひさし『ブンとフン』（CD-ROM版新潮文庫の100冊）新潮社（1995）
ラハイナ＝片岡義男『ラハイナまで来た理由』同文書院（2000）

〈付記〉　本稿は101年度台湾国家科学委員会研究計画（NSC101-2410-H-032-065）の成果の一部である。

（江雯薫　台湾　淡江大学）